

能代川での取り組み 能代川プロジェクト

新潟県新津土木事務所 渡辺 昇

Activity of Niigata Prefecture on Citizen participation of the Noudai River NOUDAI-RIVER PROJECT , by Noboru WATANABE (Niitsu Public Works Office of Niigata Prefecture)

1. はじめに

新潟県の信濃川下流部に流れ込む能代川では、平成12年7月の豪雨災害を契機として災害復旧助成事業等が採択され、4年間という短期間に本・支川あわせて31.8kmに渡り、河川改修が実施された。特に中流部の3.8km間は捷水路として、直線化した新しい川がつくられ、これまで「九十九曲がり川」と呼ばれた蛇行河川の様子は一変した。この事業により新しくなった能代川を、“ふるさとの川”として地域住民に受け入れてもらい、新たにできた170haもの高水敷きの管理と、能代川の河川環境の再生を図ることが課題となっている。本稿では、行政が住民とタイアップし、河川環境の再生に取り組んだ事例と河川管理における行政と住民の協働について考えてみたい。

2. 能代川と災害復旧事業等の概要

能代川は、新潟平野東縁の低い山地に源を発し、信濃川と阿賀野川の間を北に向かって流れ、五泉市能代付近で途中7つの支川を合わせ小阿賀野川に合流し信濃川に注ぐ、流路延長33.4km流域面積141.4km²の中小河川である。流域は新潟市、五泉市、村松町の2市1町で構成され、流域内人口は約12万4千人となっている。

下流域の新潟市に入ると、標高差わずか4m～5m以下の東西に開けた三角州性低地の中を流れるため、信濃川、阿賀野川の洪水の影響を受けやすく、過去に数え切れないほどの洪水、災害を繰り返してきた。このように地形、地勢上から、かつて「九十九曲がり川」と呼ばれるほど能代川は著しく蛇行していたが、昭和22年から中小河川改修事業が着工され、さらに昭和41・42年の連続災害を契機に、下流の4.6kmが新しく捷水路として計画され、昭和58年に概成した。

その後も引き続き改修を進めていたが、平成12年7月に中流域で700戸に及ぶ浸水被害が発生。中流域では災害復旧助成事業により、これまで35m程度の川幅を約130mに拡幅するとともに各支川についても拡幅した。下流域では、災害復旧等関連緊急事業により、この流量増に対処するため、中流域から信濃川合流点までの全川に渡り堤防のかさ上げと高水敷の切り下げが実施された。

3. 河川空間の利活用と住民参加

災害復旧事業等の完成により、地域の姿が大きく変貌することから、市民提案により堤防天端を使った「地域をつなぐサイクリングロード」の整備が実施されている。この計画作りの段階でワークショップに参加したメンバーを中心に「九十九曲がりの会」が結成された。



図 1 能代川の位置図 写真 1 中流域の蛇行の様子



図 2 能代川災害復旧等事業区間

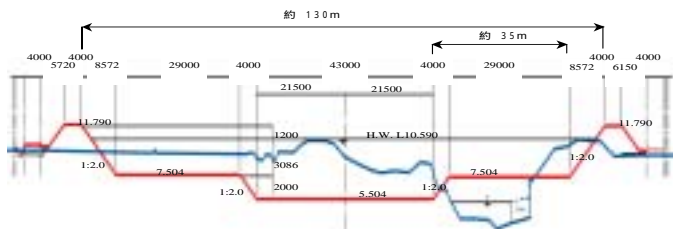


図 3 拡幅区間の横断面図



写真 2 旧川



写真 3 捷水路

平坦な流れが続き河原はほとんど河床は粘土層がむき出しにどない。護岸は矢板構造になっている。



図 4 能代川水辺サイクリングロード整備計画

「九十九曲がりの会」では、住民が主体となり堤防ウォークや花見などのイベント実施の他、活動拠点として手作りでピオトープを整備するなど、行政機関と協働してサイクリングロードを守り育てる活動を行っている。平成17年3月までに右岸側のサイクリングロードがほぼ完成したことから、会で「能代川りんりんロード」と愛称を付け、ロゴマークを作成した。今年度は市内のサイクリング協会と共催し、サイクリングラリー大会の実施やピオトープ観察会、サイクリングロードの花植などの活動を行っている。

この他にも、「新津さくらの会」や「新津ロータリークラブ」による桜の植栽。「川を活かす会」による試験菜園づくりなど、市民参加による河川敷の利活用が動き出している。

今回の災害復旧事業等の完成より、従来の約4倍にあたる170haもの河川敷が誕生することから、この河川敷を雑草生い茂るお荷物とするのではなく、地域の宝物として将来に渡り伝えていくため、利活用についての検討を進めている。河川管理者、地元自治体、県の地域機関と民間団体が協働する「能代川利活用協議会」を設立し、これまでに河川敷の「包括占用許可」に向けた勉強会や流域住民に対してアンケートを実施。「能代川利活用方針」の策定に向け取り組んでいる。

4. 多自然型川づくり研究会について

能代川では、短期間に大規模な自然の改変を伴う事業が実施されることから、河川環境の再生に向け、平成16年から土木事務所の技術職員と有識者、民間団体、能代川サケマス増殖組合員等とともに、研究会を立ち上げ、民間の意見を工事に反映させている。

研究会では 青粘土対策班、おいしい能代川の魚を食べよう班、水際検討班などに分かれ、それぞれのテーマで多自然型の川づくりに取り組んでいる。

中流域では、3箇所3.8kmにわたり、水田であった場所に捷水路が掘られているが、河床材料が青粘土の状態を通水後河床が計画河床より低下する場所が生じてきた。この河床維持のため、第一捷水路では砂利を投入し、河床低下した部分の床止めと、砂利による瀬をつくることで流れの変化をもたせ生物のすみ場の多様性を創生するよう工夫した。これにより、当初泥底だった河床が砂利底に変化したため、砂礫底を生息場にするカワヒガイ・カマツカ・トウヨシノボリ等の底性魚が採捕されるようになり、生息場創生の効果が出ている。

第二捷水路では、河床の安定と魚介類の生息環境の向上。地域活動の支援を目的に、サケの遡上・採捕に配慮し、粗朶沈床を使った床止め工を設置した。また、今年度はサケの遡上を促す導水路を研究会メンバーや地元住民。九十九曲がりの会等と一緒に「手作り」で作り上げることにしている。

5. 能代川プロジェクト

災害復旧事業等については、短期間で工事を進める必要があるため、このため、河川環境の保全や再生には幾多の課題があった。ややもすると、災害復旧という目的から治水対策が優先となり、環境面についてはなおざりになるところがある。



写真 4 九十九曲がりの会
ピオトープづくり

写真 5 多自然型川づくり研究会のワークショップ

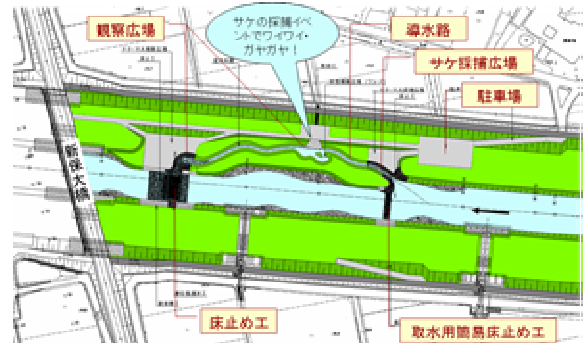


図 5 床止め工を中心とした全体構想
能代川プロジェクト

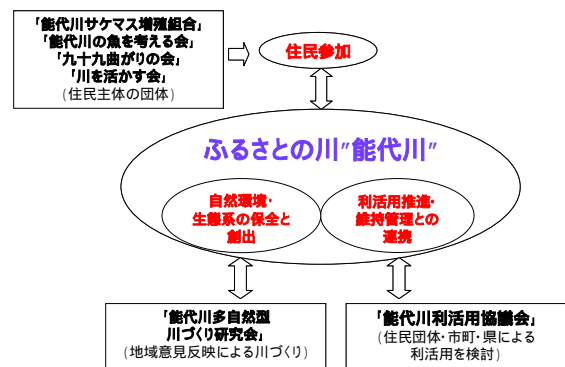


図 6 能代川プロジェクト

特に工事が終わった後などでは、その傾向が強く、関心が薄れ放置されることが多い。能代川では技術者と利用者が同じテーブルにつき、お互い理解し合い研究を進め、実践に取り組んでいる。また、能代川の水辺サイクリングロードが、川を使ういろいろな住民団体や流域の自治体を結びつけ、管理面で良い効果をもたらしている。

平成12年の災害を契機に生まれ変わった能代川であるが、新しくかつ従来より人家から遠ざかったため、住民には少し距離のある存在となった。この川をより住民の側に近づけ“うちの川”とするにはまだまだ時間が必要である。そのためには、地域住民・企業・行政の連携により多くの知恵を絞り「ふるさとの川“能代川”」として、地域住民と協働しながらこの「能代川プロジェクト」を育てていきたい。

参考文献

- 1) 新しい流れをひらく - 能代川改修史
- 2) 平成16年度地域における施策検討報告書「ふるさとの川“能代川”の創造に」に向けて」